

2017年度 聖学院大学総合研究所 <児童>における「総合人間学」の試み研究会 主催
 第1回<児童>における「総合人間学」の試み研究会
 久保田翠氏による「音・パフォーマンス・言葉」報告



発題者：久保田 翠氏

2017年度第1回「<児童>における総合人間学の試み」研究会が、2018年1月8日に開催された。今回は児童学科の久保田翠氏による「音・パフォーマンス・言葉」と題した報告がなされた。久保田氏のお話とその後の質疑の様子を以下に報告する。

タイトルは「音・パフォーマンス・言葉」という三つの単語だが、自分の創作の中では、この三つの言葉はいろんな形で重なり合っている。「音」というのはもちろん、音楽における音、楽器の音とか、声というのでも大きなくりでいくと音に入ると思われる。「パフォーマンス」、これは何か音を出す行為だったり、楽譜に指示された内容を行うことを考えている。そして最後に「言葉」。言葉は音楽においては例えば歌詞であったり、それから楽譜に書かれている指示内容としての言葉、言語であったり、時には実際にパフォーマンス作品の中で言葉を読み上げることでそれが音になったりする、意味内容が乖離してサウンドになったりするような言葉というのを考えている。

自作に関しては、大雑把に三つのタイプが挙げられると思うので、その三つの種類の作品について、

幾つかを紹介していきたい。

一つ目は歌曲で、ソプラノ3人とメゾが3人のコロスタシア・アネックスという女声アンサンブルで、そこでレジデント・コンポーザーを務めている。私のアレンジした作品の幾つかをお聞かせしたい。[讚美歌312番等CD視聴] この6人の一人一人の声を私自身が把握をしていて、アレンジの際に緻密に指示することができる点は、座つきで作曲家であることの利点である。

二つ目は現代音楽的な文脈に沿った五線譜中心の作品で、例えば22歳のときの若書きだが、2台ピアノのための作品がある。これは右手と左手、上が右、下が左だが、このお互いの和音をたたくタイミングがどンドンずれていくという、そういう場面を描いている。すごく簡単にやると……[リズム演奏]これが均等なリズムだが、これが……[リズム演奏]というふうにリズムが変動して、最終的に一つの音になるというもので、五線譜に記譜するには非常に難しい可変的なリズムをあらわすために、グラフィカルなやり方をしている。もう一つは「Further in Summer than the Birds」というエミリー・ディキンソンの詩の一節からとったタイトルの曲で、フルートとバイオリンとチェロのための作品。[CD視聴]これは先に幾つかのいろいろなジャンルの音源というのを、コンピューターでコラージュし、その音源自体を自分が聞きながら、それに対して対旋律--そこに合いの手とかハモるような動きとか、いわば注釈をつけるような形でその音源に対して自分が演奏をして、その演奏をした音源だけを全部書き取って、それをさらに演奏してもらったという作品である。

三番目はパフォーマンスの作品である。先ほどのように自分で楽譜を書いて誰かに演奏してもらう場合、作曲をしている段階で書かれた音というのは、自分の中ではかなり完璧にシミュレーションができていますが、演奏者に演奏してもらおうとそこには必ず生の音というのが発してくるわけで、

自分の描いていた音とちょっとぶれたなということを感じることがあった。そうだとすると逆にどういふ結果が出るのかわからないような記譜をして、その結果を自分で楽しんでしまえばいいのではないかと逆転の発想になり、アメリカの実験音楽のことを本格的に勉強するようになったことも影響してパフォーマンス作品に関心が行くようになった。2010年にたまたまそういったパフォーマンス的なことに興味を持っている演奏者に会い、そのときにつくったのが「EXERCISE for TWO PLAYERS」というマンドリンとギターの2人の作品である。楽譜には丸の中にいろいろアルファベットが書かれており、この丸が演奏する一つの単位となっている。例えばこの丸からスタートして、演奏が進んだら輪郭が接してるこちらの丸に次に行って、次はこちらに行ってとかいう形で、どこから自分が始めてもいいですし、どのような結果になるかわからないという作品である。〔録音ファイル視聴〕「実験音楽とシアターのためのアンサンブル」に2011年から参加をしており、このグループではパフォーマンス公演を毎年続けている。このグループのためのパフォーマンス作品を幾つか発表しており、例えば「FRAME/DOCUMENT」という2012年の作品がそれである。「形式や楽章、演奏時間の設定など、作品内外をさまざまに区切るフレーム（枠）、そうしたフレームだけを種々雑多に重ねた、できる限り空っぽの作品をつくってみたいという衝動に基づいて制作したのがこの作品である。音楽でいうところの3部形式、個々のパフォーマーは自分の行うこと以外の内容を知らされていない。作曲家から個別に課せられたタスクを忠実にこなすことで他のパフォーマーたちとかかわりつつ、生々しくフレームを形づくっていく」という作品である。〔映像〕

今回自分なりに作品を振り返ってみて、自分にとって大事なものとして、三つが考えられると思う。一つは、記譜と音との関係性で、五線譜と特殊な記譜というものがあり、そこから鳴る音とい

うもののあり方の、つながり方がどのようなものであるかということがある。二つ目としては、記譜と音との間に自分の身体を差し挟むこと、これは自分がいちパフォーマーとして、もしくは作曲者兼パフォーマーとしてパフォーマンスするということであり、それは非常に自分にとって重要である。例えばほかの人から見るとミスしたとか、ほかの人から見ると不首尾な、うまくいかなかった演奏とかであっても、その作品のフレームのつけ方によって、それはすごく重要なあり方に変貌するということが挙げられると思う。三つ目が音と言葉の関係性です。例えば作曲者として歌詞を扱う場合と、それから記譜としての言葉ということが挙げられる。作曲者というのは、言語によって命令を下す、遂行させるということになるが、そういう立場に立つことというのが、作曲者あるいは作曲者兼パフォーマーとして作品上演に関わるということでもある。

いわゆる論文を書くという意味での研究活動としては、クリスチャン・ウォルフという作曲家について研究しているが、論文を書いていると、特に三番目のことは、研究と近い点がある。というのは、ある言葉というものがあって、その言葉の扱う範疇とか、言葉の定義でとか、その言葉の働き方を決めるといったことは、ある意味論文を書いているときの、言語を自分が用いているときの頭の使い方とちょっと似たところがあって、実作と研究は言葉を介すると近いものになると思っている。自分でやってきたこと、自分の興味・関心などを通じてさらに皆さんと、そして聖学院の中全体でいろんなことを一緒に行ったり、つながりができたらと思っている。

報告の後、音と音楽について、あるいは幼児の表現との関わり等について有意義な質疑が行われた。

（文責：鎌原雅彦 [かんばら・まさひこ] 聖学院大学人間福祉学部児童学科教授、児童学科長）